平成３０年度・事業報告書

社会福祉法人　コージー南国

1、法人事業報告

イ、経営目標について

平成３０年度も引き続き経営の改善と運営の安定化に努めた。平成３０年度経営目標として、実利用者数を生活介護１２名から１５名・就労継続支援Ｂ型９名から１０名に目標値を設定した。

平成３１年３月末現在、生活介護実利用者数１６名、就労継続支援Ｂ型１３名と前年度から生活介護４名、就労継続支援Ｂ型３名、新規利用増とすることが出来た。

また、コージー南国の運営方針としての障害程度＝支援区分が高く受け入れが困難な方を受け入れていく方針を昨年度に引き続き継続してきた。

山田特別支援学校の新規卒業生２名の内１名は、自閉症で強度行動障害を伴う支援区分５の支援度の高い利用者、もう一名はコージーで実習時から山田特別支援学校の先生が１名付き添い、実習時から支援区分は５以上の対象者と感じていたが、判定結果は予想外に支援区分３であった。

実際のところ、この２名の利用者はこれまでの利用者より最も支援困難であった。区分３の利用者は区分見直しで、日常の実態を認定調査で認識していただき、なんとか区分５に変更できた。区分３と区分５では支援費単価に３６．６％の差があり、本来なら利用開始時から区分５で判定されるべきであったが、今後は適切な判定を望みたい。

しかし、こうした支援度の高い利用者の方を受け入れたことにより、支援費単価が上がり収入増につながった。支援度が高ければ当然、常に１：１のスタッフ配置が求められるため、スタッフを多く配置しなければならず、人員増を図るためには、それに見合う区分判定がなされて、それに応じた支援費単価が保障されることによって人員増を図ることができ、支援体制の充実化につなげることができる。

支援困難な利用者であるにも関わらず軽い判定がなされれば、人員増も図れず結果として、現場支援スタッフの肉体的精神的疲弊が軽減されず、退職につながりかねない。その意味においても障害程度に見合う、適切な支援区分判定をお願いしたい。

ロ、平成３０年度の職員配置体制は以下のとおり

（表１）

多機能型	生 活 介 護		就労継続支援Ｂ型		
職　　種	常　勤	非常勤	常　勤	非常勤	配置基準
管理者		1（兼）		1（兼）	1
サービス管理責任者	1（兼）		1（兼）		1
生活支援員	3	2	1（兼）	1	4
職業指導員			1		1
医　師		1			1
看護師	1				1
事務員	1		1（兼）		
合　計	6（兼1）	4（兼1）	3（兼1）	2(兼1)	

５月末に事務員が産休に入ったため、就労Ｂ担当の事務経験のある支援員を事務員と兼任してもらった。

また、生活介護の支援困難利用者の増加に伴ない、生活介護にパート支援員を１名増員を図った。

ハ、平成３０年度月別利用者推移は以下のとおり

（表２）

Ｈ３０	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
生活介護	１５	１５	１５	１６	１７	１７	１７	１７	１７	１６	１６	１６
就労Ｂ型	１０	１０	１１	１１	１１	１１	１１	１１	１１	１２	１２	１３
合　計	２５	２５	２６	２７	２８	２８	２８	２８	２８	２８	２８	２９

生活介護利用者数が４～６月に１５名、７月１名増で１６名、８月にさらに１名増で１７名、１２月まで１７名であったが１名利用困難となり、翌１月に１名減となり１６名となった。

就労継続支援Ｂ型は、４～５月＝１０名、６月～１２月＝１１名、１月～２月＝１２名、３月＝１３名で年度始めから３名増となった。

ニ、平成３０年度月別利用延日数

平成３０年度は５月が１７日、１月が１５日と稼働日数が少なかった（２０日締め）が、利用延べ日数は生活介護が対前年度７７０日、就労Ｂが対前年度４２２日増、計１，１９２日増となった。

（表３）

Ｈ３０	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
営業日数	２２	１７	２３	２１	２１	２２	１９	２２	２１	１５	２２	２０
生活介護	277	231	319	302	300	326	269	317	300	213	321	274
就労Ｂ型	172	137	192	154	149	165	152	180	163	135	196	199
合計	449	368	511	456	449	491	421	497	463	348	517	473

ロ、運営目標について

平成３０年度も、支援業務の一連の流れ（個別支援計画作成→支援サービス実施→記録・評価→個別支援計画見直し→支援サービス実施→記録・評価）及び担当者会議・モニタリングといった一連の手順の実践と理解に努めてきた。

また、昨年から継続して利用者主体の意思決定の尊重に基いて、生活介護、就労Ｂ、それぞれの代表がみんなの意見を聞き、行事計画に反映することができた。

平成３０年度は、前年度以上に利用者間の協力支援関係が広がってきている。

１、法人事業報告のイ、経営目標の項で触れた、支援困難でパニックを起こす利用者が、スタッフの声かけや促しには拒否的態度を示す時でも、年配の利用者が促すと、イヤがったり怒ったりすることなく素直に受け入れることもあり、利用者間の関係性は、職員と違い言葉による指示や促しよりも、表情や態度で示すことが受け入れやすい要因とも考えられ、年代を超えた利用者間の協力支援関係作りの重要性の一端を示しているといえる。

このように、利用者自らが、自分たちの思いや意思を表明し行動に移し、また職員や周りの利用者との関係性を通して、周りへの依存性を減らし、自ら自己決定することにもつながっている。

今後も生活のあらゆる場面で、自ら判断し行動に移すことにつなげたい。

Ⅱ、事業活動報告

① 生活介護

生活介護の週間予定は以下のとおり

（表４）生活介護週間予定表

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
午　前	散歩活動 作業活動	散歩活動 作業活動	散歩活動 作業活動	散歩活動 作業活動	散歩活動 作業活動
午　後	カラオケ	あくた 運動レク	読み聞かせ	創作活動	喫　茶 コージー

イ、作業活動

生活介護の午前の作業活動は、①空き缶回収・広報活動、②アルミ缶とスティール間の仕分け・空き缶のプルタブはずし、③手袋の整形・袋入れ作業を行っている。

ロ、散歩活動

前年に引き続き、生活介護は午前に利用者の体力低下防止、健康維持増進を目的として散歩活動に取り組んだ。

昨年からの継続で、遠距離組と短距離組の２班に分けて取り組んだ。散歩活動は定着してきており、個々の利用者がその日の自分の体調や気分(精神状態)により、散歩活動への参加、距離の長短を自分自身でコントロール(自己決定)できるようになってきている。

ハ、空き缶リサイクル活動

空き缶リサイクル活動も定着してきており、久礼田地区や比江地区を中心に回収と広報活動のチラシ配りを行った。家庭で空き缶が一杯になれば、電話で知らせてくれ回収にいくパターンが多くなってきている。

また、近隣のコンビニ(ローソン・ファミリーマート)の協力を得て、週２回、回収している。さらにガソリンスタンドや双葉台のいくつかの会社も協力していただき、定期的に回収を行っている。

ただ、コンビニから回収してきた缶にはダバコの吸い殻やティッシュなどを詰めているものが少なくなく、取り除くのに四苦八苦している。

ニ、創作活動

創作活動も、すっかり定着してきており、月ごとの壁画創り、紙飛行機作り、そして、秋のスピリットアート展に向けた作品創りなどに取り組んだ、平成３０年度も生活介護の利用者が入選し、表彰式で県知事表彰を受けた。

ホ、カラオケ活動

カラオケも昨年から継続して取り組んでいるが、これまで使用していたカラオケが故障し使えなくなったため、止む無く新たに買い替えることとした。もともと以前より利用者から曲目を増やして欲しいとの要望が出ていたので、これまでのカラオケよりも曲数が大幅に多いカラオケを導入した。

新しいカラオケ導入を契機に、これまで全くカラオケに参加しなかった利用者に「曲目が増えたので好きな曲を捜してみて」と促すと、何人かカラオケに参加するようになった。

ト、本の読み聞かせの取り組み

本の読み聞かせについては、当初は職員が利用者に読み聞かせをしていたが、利用者主体の観点から、利用者の中で字の読める利用者に本を読み聞かせしてもらう試みをしたところ、全く抵抗なくみんなも仲間の本の読み聞かせに参加できている。

チ、喫茶コージーの取り組み

本年度も昨年同様、一日、一週間、一ケ月といった時間の流れ、日の流れ、一週間の流れ、月の流れ、春夏秋冬といった四季の流れを感じ取ってもらい、生活と活動にメリハリをつけるため、喫茶コージーに継続して取り組んだ

毎週金曜日は、一週間の締めくくりの日であり、一週間の活動の締めくくりを意識付けることと、通常の金曜日は利用者が当番制でウェイトレス・ウェイターとなって、エプロン、三角巾を頭に巻き、メモ帳を片手に利用者や職員から注文取りを

して、でき上った飲み物とデザートをテーブルに運ぶ一連の流れがすっかり定着している。

月の最終金曜日は、職員がウェイトレス・ウェイターとなって、逆に利用者におもてなしをしている。喫茶コージーは利用者の大きな楽しみとなっている。

平成３０年度生活介護の月別利用者推移は次のとおり

（表５）生活介護利用者Ｈ２９・Ｈ３０年度利用者推移対比表

生活介護	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ｈ２９	１２	１３	１３	１３	１３	１２	１２	１２	１２	１３	１３	１５
Ｈ３０	１５	１５	１５	１６	１７	１７	１７	１７	１７	１６	１６	１６

上記のとおり、前年度、平成２９年４月の利用者は１２名、年度末の３０年３月に１５名となった。平成３０年４月から６月まで１５名で推移、７月に１６名、翌８月に１７名となり、１２月まで１７名で推移したが、翌１月に再び１名減の１６名となった。

この１名の利用者は、家庭での対応が困難となり精神科に入院となったため、利用解除となった。

平成３０年度生活介護の利用者支援区分は次のとおり

平成３０年度、生活介護利用者支援区分

Ｈ３０	区分２	区分３	区分４	区分５	区分６
人数	０名	１名	６名	８名	１名

平成３０年度の区分見直しに際し、現在の利用時における状況について認定調査時に時間をかけて説明を行なった結果、区分２から３に１名、区分３から４に１名、区分３から５に１名、区分変更となった。

利用者によって、その時期その時期によって意思表示状態や行動状態に変動が見られ、改善が見られていても再び低下することもあれば、逆にレベルが低下していても改善されることもある。可能な限り安定した生活レベルが保たれるよう、今後も支援に努めたい。

平成３０年度の生活介護の作業活動による収入および工賃は以下のとおり

（表６）平成３０年度・生活介護月別作業収入・作業工賃

生活介護	箱折り	手　袋	空き缶	作業収入計	作業工賃
４月	1,512	16,055	2,570	20,137	24,200
５月	2,268	15,803	6,980	25,051	23,100
６月	—	14,124	3,544	17,668	31,900
７月	—	14,502	4,972	19,474	30,200
８月	1,512	7,959	6,482	15,953	46,000
９月	2,268	8,155	3,872	14,295	32,600
10月	—	6,054	6,412	12,466	26,900
11月	1,512	8,439	4,992	14,943	31,700
12月	1,512	5,060	4,538	11,110	54,000
１月		1,968	2,814	4,782	21,300
２月		7,185	0	7,185	32,100
３月		8,406	5,490	13,896	27,400
合計	10,584	113,710	34,600	176,960	381,500

平成３０年度は、生活介護の作業活動は箱折り、手袋成型袋詰め、空き缶回収とプルタブはずし、広報活動に取り組んだ。

箱折り作業は浜幸の箱（銘菓選）１種類、野根まん１種類で、出来る者は１５名中３名のみとなっている。就労Ｂもメインの作業活動を箱折りからゆず皮トリミングにシフトしており、箱折り作業から平成３０年度で全面撤退することとした。

リ、支援困難な利用者への取り組み

平成３０年度生活介護の新規利用者は２名、２名のうち１名はダウン症で茶目っけはあるが、反面、声かけや指示への反応が乏しく、再三声かけすると激高し、自傷と共に他傷行為や激しい破壊行為のみられる支援困難な利用者、もう１名は自閉症で強度行動障害が伴い、言語によるコミュニケーション不可、度々パニックを起こし、やはり激しい自傷行為と共に他傷行為の見られる利用者、両名ともパニックを起こすと、女性スタッフ２～３名でも抑えきれないほど力も強く、これまでのコージーの利用者で最も支援困難な利用者となった。

さすがに、コージーでの支援はやはり無理ではないかと感じ担当者会議の際、このまま変わらないようであればコージーでの支援は無理になるかもしれないとご家族に相談したこともあった。

しかし日を追うにつれ、それぞれの性格特性、行動特性が理解できるようになり、また、本人もコージーの雰囲気に慣れてきて、徐々にパニックを起こす頻度が減少してきた。やはり短期で変化を見るのではなく、数か月、数年単位で変化を見ることの重要性を痛感した。今回１名は数か月で予想以上の変化が見られた。もう１名も当初から比較すると確実にパニックが見られなくなってきている。

② 就労継続支援Ｂ型

平成３０年度就労継続支援Ｂ型の週間予定は以下のとおり

（表７）就労継続支援Ｂ型週間予定表

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
午　前	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ
午　後	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ	箱折り組立 缶回収潰し 割り箸入れ

就労Ｂの作業は、永年、浜幸の菓子箱組立作業をメインに取り組んできたが、新規利用者で箱の組立完成品までできる利用者はほとんどいず、箱の折り目作業止まりのため、昨年は浜幸と協議し、１日の仕上げ量を２００箱上限とさせてもらった。
箱の組立作業ができなくても、ゆず皮のトリミング作業は可能であり、メインの作業を箱の組み立てからゆず皮のトリミングにシフトした。

一方、箱の組立１日の仕上げ量を２００箱上限と取り決めていたが、繁忙期になると浜幸よりなんとか助けて欲しいとの協力要請があり、長年仕事を提供してくれていた事もあり、この１年、浜幸さんが困っている時は協力することとした。また、年度末の３月で箱折り作業から全面撤退することを浜幸さんに伝えた。

平成３０年度の就労継続支援Ｂ型の月別利用者推移は以下のとおり

（表８）平成３０年度就労継続支援Ｂ型月別利用者推移

就　労 Ｂ　型	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
Ｈ２９	５	７	８	８	８	９	９	９	９	９	９	１０
Ｈ３０	１０	１０	１１	１１	１１	１１	１１	１１	１１	１２	１２	１３

平成２９年度は年度初めに５名であったが、年度末には１０名に倍増することができた。平成３０年度は，年度初め１０名で年内は１名増の１１名、年明けの１月から１２名、年度末の３月には１３名と対前年度３名増であった。

平成３０年度の就労継続支援Ｂ型月別作業収入と作業工賃は以下のとおり

（表９）平成３０年度・就労継続支援Ｂ型月別作業収入・作業工賃

就労 Ｂ型	箱折り	割り箸	ゆず	なす	空き缶	作業収入	作業工賃	収支比率
４月	57,880	2,160	—	5,470	10,280	75,790	123,362	162.8%
５月	29,241	6,804	20,250	31,507	27,920	115,722	103,564	89.5%
６月	29,273	12,474	67,554	5,638	12,576	127,515	144,261	113.1%
７月	27,774	3,024	41,148	—	19,888	102,124	120,855	118.3%
８月	48,589	5,670	32,108	—	25,928	117,336	117,378	100.0%
９月	72,817	9,072	64,570	—	15,488	161,947	129,857	80.2%
10月	25,898	5,940	104,136	8,033	23,568	167,575	106,560	63.6%
11月	56,830	5,670	58,854	21,146	17,368	159,868	134,386	84.1%
12月	85,702	12,852	36,998	17,976	18,152	171,680	119,402	
１月	35,672	11,718	66,841	22,668	11,256	148,155	97,655	65.9%
２月	34,749	10,368	66,631	25,153	0	136,901	145,964	106.6%
３月	44,383	5,670	72,412	23,516	21,960	167,941	141,342	84.2%
合計	548,808	91,422	631,502	161,107	204,384	1,652,554	1,484,586	89.8%

昨年、清水基金の助成で購入した「空き缶プレス機」によって、１個１個潰す処理量から一度に大量処理が可能となり、それまで山積みされていた空き缶を入れたコンテナが、あっという間に空になり、少し間が開くようになった。新たにコンビニやガソリンスタンドから回収の協力を得て、多量に回収できるようになったが、一面コンビニの空き缶には、タバコの吸い殻などが詰められているものが結構あり、その除去に手間がかかるのと、コーヒーとニコチンが混ざった独特の臭い(悪臭)がデメリットとなっている。

また平成３０年度から、箱折り作業が減った分、ゆず皮のトリミング作業を初め、なすの袋詰め作業、空き缶のプレス作業等、作業種目に幅が出来て、利用者の能力に応じ

た作業の選択が可能となったのと、それぞれの作業を交代で行うことにより、仕事の変化がかえって気持ちの切り替えとなり、利用者にも好評である。

③　日中一時支援事業

平成３０年度の日中一時支援事業の利用者は１名のみに留まった。

利用日数は、計１１日に留まった。

（表１０）平成３０年度日中一時支援事業月別利用者推移

Ｈ３０	７月	８月
利用数	１人	１人
日　数	７日	１７日

④　実習生受入れ状況

（表１１）平成２９年度の実習受入れ状況は以下のとおり

受入れ期間	受入れ日数	受入れ人数	実習依頼先
平成 30 年 5 月 14 日～5 月 25 日	１０日	１名	山田養護学校
平成 30 年 5 月 21 日～5 月 25 日	５日	１名	〃
平成 30 年 6 月 11 日～6 月 15 日	５日	１名	〃
平成 30 年 6 月 4 日～6 月 15 日	１０日	２名	山田養護学校
平成 30 年 6 月 7 日～6 月 8 日	２日	１名	若草養護学校
平成 30 年 6 月 14 日～6 月 15 日	２日	１名	若草養護学校
平成 30 年 10 月 15 日～10 月 26 日	１０日	１名	山田養護学校
平成 30 年 10 月 15 日～10 月 26 日	１０日	２名	山田養護学校
平成 30 年 10 月 4 日～10 月 5 日	２日	１名	若草養護学校
平成 30 年 10 月 11 日～10 月 12 日	２日	１名	若草養護学校
平成 30 年 11 月　5 日～11 月 16 日	２日	１名	山田養護学校
平成 31 年 1 月 16 日～ 1 月 22 日	７日	１名	〃
平成３０年度・合計	６７日	１４名	（延べ日数・人数）
平成２９年度受け入れ実績	６０日	１４名	

平成３０年度は、前年に比べ、日数は７日増となったが、人数は同数となった。昨年

の実習生で新規利用は山田養護から就労Ｂに１名であった。前年度、生活介護に支援困難利用者を２名受け入れたため、学校側に次年度の生活介護の新規受け入れは厳しいと伝えていたため、学校側の配慮もあったと思われる。

⑤　職員研修

イ、施設内研修

平成２９年度は、年度当初に３名の常勤職員の新規採用を行った。新採用職員には初日新採オリエンテーション実施および新人研修を実施、採用１ケ月目職務評価実施、採用３ケ月目職務評価実施、採用６ケ月前本採用事前研修実施を経て、本採用試験を実施した結果、３名共基準点以上で本採用とした。

この３名の内、２名は介護福祉士資格保有者で介護実務経験のある職員であったため、障害者支援に関する研修の理解も早く、支援業務に対してもその基本的な姿勢は備わっており、その支援取り組み実践については、事業報告の生活介護の※「自立支援に向けた取り組み」を参照されたし。

（表１２）平成３０年度の研修は以下のとおり

研修実施日	内部研修	外部研修
４月１１日 講師(支援統括長) 長谷川真弓美	事例研修 （小松・武田・松村・坂本 ゆ・浅井・為近）	
８ 月１日 講師(管理者) 長谷川憲隆	人(障害者)の尊厳について （小松・武田・松村・坂本　ゆ・浅井・為近）	サービス管理責任者初任者研修 参加：長谷川真弓美
９ 月６日 長谷川真弓美 森本紫乃		見 学 研 修 若草養護学校
10月11～12日(水) 参加者 森本紫乃		強度行動障害支援者養成研修 主催：県障害福祉課
１１月７日 講師：支援統括長 長谷川真弓美	ＩＣＦ(国際機能分類)について	
１１月２１日 講師：支援統括長 長谷川真弓美	研修報告書の書き方	

２月１３日（水） 講師：土佐希望の家看護生活支援副部長・中西純	支援困難利用者にどのように関わればよいか」	
３月２７日 参加者：寺田珠久 長谷川憲隆		スーパーバイザーを活用した実践報告会(支援困難事例) 主催：南海学園

⑥　防災訓練

平成３０年度防災訓練は、火災(消火・避難)訓練１回、地震訓練３回、風水害訓練１回実施した。

南国市は概ね南国バイパスから北側は津波浸水区域外となっており、コージーの所在地は海岸線から８．９Ｋｍ、海抜１３．９ｍで、津波の危険性はないが、コージー東側約３００ｍを流れる領石川が、近年の想定外の大雨が降った場合、コージーの南約２００ｍが本流の国分川合流地点であり、本流の増水時は領石川が流れ込まなくなり、領石川の氾濫の危険性が高まる。

過去の氾濫歴では、領石川の西岸よりも東岸側に氾濫しており、万一コージー側の西岸に氾濫しても現トラック団地予定地よりも、さらに３ｍくらい土地が高いため、氾濫発生の場合も浸水の危険性は低いと考えられる。

ただ、万を持して浸水を想定した避難訓練を実施しており、コージーの西隣りのオルタステクノロジーさんの協力を得て、最終避難先とさせてもらっている。

（表１３）平成３０年度防災訓練は以下のとおり

訓練実施日	訓練内容	参加者数
５月１７日 11:00～11:30	地震・火災避難訓練 (一時避難机下、初期消火・二次避難屋外)	利用者：２１名 職　員：１０名 その他：　３名
８月２９日 9:30～10:00	地震・避難訓練 （一時避難机下）	利用者：２０名 職　員：１３名 その他：　１名
１０月３０日 11:00～10:00	水害避難訓練 （屋内２階へ避難）	利用者：２３名 職　員：１１名
１月２３日 10:30～11:00	地震避難訓練 （屋外へ避難）	利用者：２４名 職　員：１１名 その他：　１名
２月２１日 13:30～14:00	県知障福協合同防災訓練 地震避難・通報訓練 (避難先) オルタステクノロジー	利用者：２２名 職　員：　８名

⑦　次年度に向けた課題

平成３０年度は、生活介護に支援困難な新規利用者を２名受け入れた。当初の想定以上に大変であった。パニックによる攻撃性でスタッフも何人かはケガをした。しかし、時間の経過とともに慣れてきて、パニックを起こす頻度も確実に減った。

令和元年度は、利用者の性格特性、行動特性を理解し、パニックを起こす要因を適切に把握し、少しでもパニックに至ることのないよう、自閉症・行動障害等の利用者への支援力を高めるべく、職員を関係研修に参加させたい。

就労継続支援Ｂ型は、作業種目の充実化が図られてきたが、作業量をアップし作業収入の拡大を図るには利用者が足りないため、さらにＢ型の新規利用者増を図り、工賃のアップにつなげていきたい。